

神話世界を地形地質学的視点で語る 新しい文理融合型の地域資源： くにびきジオパーク・プロジェクトの取り組み

ユーラシア大陸東縁には、大陸と海洋の巨大なプレートが接する変動帯として、花づたの弧状列島 (festoon islands) が形成されている。そこでは地震や火山活動が活発に起こっており、日本列島はその活動的縁辺域を代表する地球史を有している。いま、この日本列島のもつ変化に富んだ地質を市民感覚で学習し、地域の誇るべき自然として内外にアピールする活動が盛り上がっている。いわゆるジオパーク活動である。ジオパークは、地質学的に重要な場所の保全・保護、自然理解のための教育と研究、そして地域振興を目指しており、一般に「大地の公園」と訳される。

ジオパークは、2004年にユネスコの支援のもと世界ジオパークネットワーク (GGN) が発足し、それを受けて2009年に日本ジオパークネットワーク (JGN) が設立された経緯をもつ。現在、国内では36地域がJGN、6地域がGGNにそれぞれ認可され、そこでは日本を代表する地質学的自然を感動することができ、ジオパークの価値が一層高まっている。このようななかで、島根大学では、島根半島や宍道湖・中海を含む地域を従来とはひと味違った形でジオパーク化を目指している。

このプロジェクトでは、ユニークな地形地質学的現象をもつ自然を求めると、古来より人びとが語りつないできた神話的自然を、改めて現在の人びとも目を向けてもらい、現在にも通じる古代の自然観を学ぼうというものである。ひとつの例を示そう。733年に撰進された出雲国風土記は、この地域の地誌・文化・動植物の産状を克明に記述した郷土誌であるが、そのなかに「国引き神話」がある。神様が新羅の国 (朝鮮半島) や越の国 (能登や新潟) から陸塊を引き裂き、太い綱で島根半島まで引いてきたという。この物語自体は、民俗学にあるダイダラボウの世界である。しかし、一笑に付すことができない地質学的側面をもっている。1980年代中頃より明らかになってきた西南日本の時計回り回転説や日本海拡大説が説く列島形成にその動的な姿が似ているためである。また、本特集にあるように半島をつなぐ平野の拡大が人々に神のなせる技として映ったのかもしれない。そのようにみると、風土記時代に語られた自然と結びついた神話を歴史家のみならず、自然科学の成果を入れることで、より楽しく、そしてより深く自然を理解することができよう。島根半島の地形地質とその成り立ちがより身近な現代人の感覚のなかに生きてくる。このように、私たちの「くにびきジオパーク」構想は、風土記時代の自然観を地形地質学的基盤のもと最近の科学的知見を取り入れて、新しい文理融合型の地域資源へと発展させる試みである。近年ますます自然離れが進行するなかであって、古来より人びとが語りつないできた自然を理解することは、現在を生きる私たちの生活がいかに自然と結びついたものであるかを改めて考える機会にもなる。そこに自らの防災的視点が生まれ、地域の持続的発展の機会が生まれてくるにちがいない。

島根大学教育学部教授
島根大学くにびきジオパーク・プロジェクトセンター長
野村律夫